

東日本における弥生後期の交流

石川 日出志（明治大学文学部）

【話のあらすじ】 新潟市には、秋葉区古津八幡山遺跡と西区六地山遺跡という新潟県域における弥生時代後期（紀元後1～3世紀頃）を代表し、なおかつ弥生時代の東日本を考える際に重要な遺跡があります。現在も、そして過去にも、新潟県域は、西の北陸、北の庄内・秋田方面、東の会津・福島方面、南の長野・群馬両県域など周辺地域との往来が盛んです。とくに弥生時代後期は、東西南北諸地域と人・物資・情報の往来が著しいことが分かっています。今から2000年近い昔の人々の躍動の様子を、各地の遺跡から発見された資料をとおしてご紹介しましょう。

1. 天王山式土器とは？

今回の企画展の主役は「天王山式土器」です。新潟県の下越と中越のいくつもの遺跡で発見されている土器型式で、福島県白河市天王山遺跡で1950年に発掘された資料が基準となっています【資料1】。とても不思議な特徴をもつことから、弥生時代でもいつ頃なのかと議論が繰り返されました。私は、そのような経緯があるので「考古学者を惑わす土器型式」と呼んで、他人事のように見てきましたが、最近「お前もずいぶん間違っていたんだよ」と批判され、今、原点から考え直しているところです。

2. 新潟県域の弥生時代後期の遺跡

新潟県内に弥生時代の遺跡があることは戦前から知られていましたが、戦後1952年に佐渡・千種遺跡が発掘されて、弥生・古墳移行期の土器群とともに、鋤鍬や建築材の断片が見つかり、全国的に注目されました。しかし、六地山遺跡（1956年発掘）など県内各地で弥生時代後期の遺跡が発見・調査されましたが、集落や生活の内容まではなかなか明らかにできませんでした【資料2】。そうした中で、1987年から始まった古津八幡山遺跡の発掘調査で、丘陵の上に立地する大規模な集落遺跡の内容が判明し【資料3】、全国的な注目も集め、国史跡に指定されました。現在では、粗密はありますが県内で全域に弥生時代後期の遺跡が見つかっており、様々な遺構や遺物から、人々が広範囲に交流を重ねる躍動の様子が分かるようになりました。それをご紹介するのが本日の主題です。

3. 弥生時代「越後」の躍動

現在もそうですが、どの時代も越後はその周辺・東西南北の人々が往来する地でした。今日採り上げる弥生時代後期（AD1～3世紀）は特にそれが顕著な段階でした。その前触れは、直前の弥生時代中期後半（BC1世紀）にすでに表れています【資料4】。県内の遺跡で発見される土器を見ると、北陸系（小松式）、会津系（川原町口式）、庄内・秋田系（宇津ノ台式）、信州系（栗林式）という各方面に由来する土器が県内各地で折り重なるように発見されます。新発田市山草荷遺跡は、戦前の小規模な発掘成果から全国的に知られた遺跡ですが、東西南北諸地域の土器がすべて確認できます。

弥生時代後期前半（AD1世紀）になると一層、地域間の往来が明瞭となります。この時期は、下越では、福島方面と同じ天王山式土器が分布しますが、土器の頸部に幾重もの菱形からなる秋田系の図形がよく採用されています。こうした下越の土器とよく似た土器が富山・石川両県の各地で見つかります【資料5】。それだけでなく、この天王山式土器に特徴的に伴う「アメリカ式」石鏃が、しかも下越特産の石材でつくられ、天然アスファルトが付着した実例が大阪府芝生遺跡で見つかっています。下越周辺の人々が北陸以西の地域にまで遠征していることが分かります。

彼らは何を目的に西方に遠征したのでしょうか。一つ考えられるのは、朝鮮半島に産出する鉄資源から

つくられた鉄の地金や道具の入手です。当時日本列島では、砂鉄や鉄鉱石から鉄素材をつくる技術がなかったために半島からすべてを移入していました。そうした最先端の素材を入手するために、北陸以西に遠征したのではないかと思います。

当時の人々は稲作農耕民ですから低地にムラを構えるはずなのに、ちょうどその頃から新潟を含む北陸一帯で、古津八幡山遺跡のように、丘陵上にムラを構える高地性集落が登場します【資料6】。様々な意見がありますが、私は社会的緊張（集落間の争いが起こりえる状況）が原因であると解釈しています。

4. 弥生後期後半（AD2～3世紀）の東西広域交流

後期前半（AD1世紀）では、下越を主とする天王山式土器の集団が北陸以西に進出していたのに、後期後半になると、事態が逆転して、北陸以西から新潟県域やさらに東方への動きが顕著になります。

例えば、会津盆地のほぼ中央部にある湯川村桜町遺跡では、在来の天王山式系統の土器の他に、北陸系土器が目立つようになります。それだけでなく、平地住居や方形周溝墓という東海から北陸にかけてみられた住居・墓の流儀も明瞭になっています【資料7】。

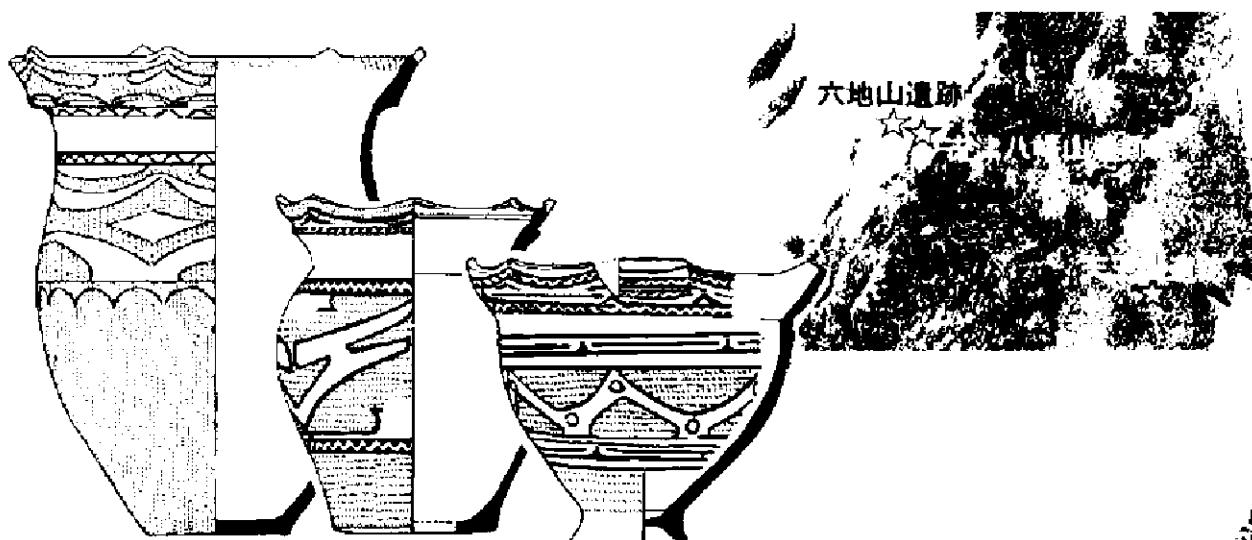
会津盆地でさえこのような状態ですから、新潟界限は一層、西方世界からもたらされた流儀や文物が顕著になっています【資料8】。北陸以西からの鉄製鋤先（上越市裏山遺跡）、北近畿に多い二段掘り墓穴と土器副葬（長岡市屋鋪塚遺跡）、さらに九州からの壺（柏崎市開運橋遺跡）朝鮮半島からもたらされた鉄斧（長岡市姥ヶ入南遺跡・三条市経塚山遺跡）などからそのことが分かります。

しかし、下越では、北陸以西に由来するものだけでなく、逆に東北や北海道方面と相通じる状況も確認できます。秋葉区古津八幡山遺跡では、方形周溝墓という墓葬の流儀は北陸や東海、鉄剣など鉄製武器を副葬する習俗は北近畿・山陰を経て朝鮮半島にまで源流をたどれるものです。しかし打製石鏃を副葬するのは北海道方面に由来するものです。村上市山元遺跡の墓地では、ガラス玉（多数）や鉄製短剣副葬は北陸以西に由来しますが、土坑墓と壺棺墓、壺棺や打製石鏃の副葬は北方系です【資料9】。それどころか、新潟県内では、村上から上越前の平野部や沿岸部の各所で、江別C1式という北海道系（続縄文）土器を出土する遺跡がかなりの数見つかっています【資料10上】。東北地方でも太平洋側では古墳時代前期の4世紀になると続縄文土器の南下が見られますが、この段階ではまだはっきりしません。日本海側で先行して、北方系集団が南下して西方から新潟県域まで往来してきた人々と交流や情報と物資の交換が行われたとみてよいでしょう。西方からやってくる人々は準構造船、北方からくる人々は丸木舟という、異なる構造の船・舟を操舵して新潟県域で交わっていたと考えられます。

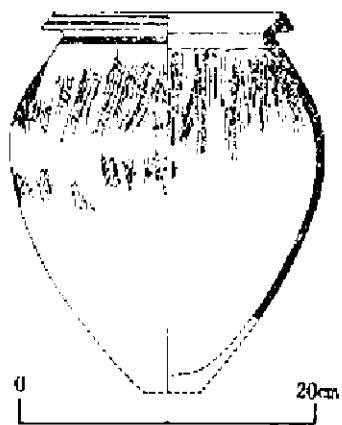
5. 東アジアの広域交流

このような往来は、なにも新潟界限や北陸、あるいは東日本だけの閉じた世界の動きではありませんでした。長野県北部の木島平村根塚遺跡で朝鮮半島製と思われる渦巻飾付鉄剣、長野市浅川端遺跡で朝鮮半島製の馬形帯鉤（バックル）、上田市上田原遺跡でも朝鮮半島製鉄矛が見つかっています。佐久市北一本松遺跡の板状鉄斧もそうですし、先に触れた新潟県内の姥ヶ入南遺跡の袋状鉄斧、経塚山遺跡の板状鉄斧も朝鮮半島で製作された製品です。三国志魏書には、現在の韓国東南部に鉄が産出し、朝鮮半島各地や日本列島の人々もこれを利用していたことが記されています。弥生時代後期は、一斉に利器が石器から鉄器に置き換わった時期ですが、その原料（鉄地金）はすべて朝鮮半島に依存していました。朝鮮半島の物資が日本列島全域に流通し、東北や北海道の人々もそうした物流ネットワークの中にもありました【資料10下】。

こうした広域交流が盛んとなった弥生時代後期に、日本列島西部の社会の最上位層が中国本土の強大な政治中枢（漢王朝）と政治的 direct 交渉を行っています【資料11】。新潟県域の遺跡から明らかになった弥生時代後期の広域交流は、そうした東アジア全域にわたる大きな歴史動向の中にあつたとみるべきでしょう。

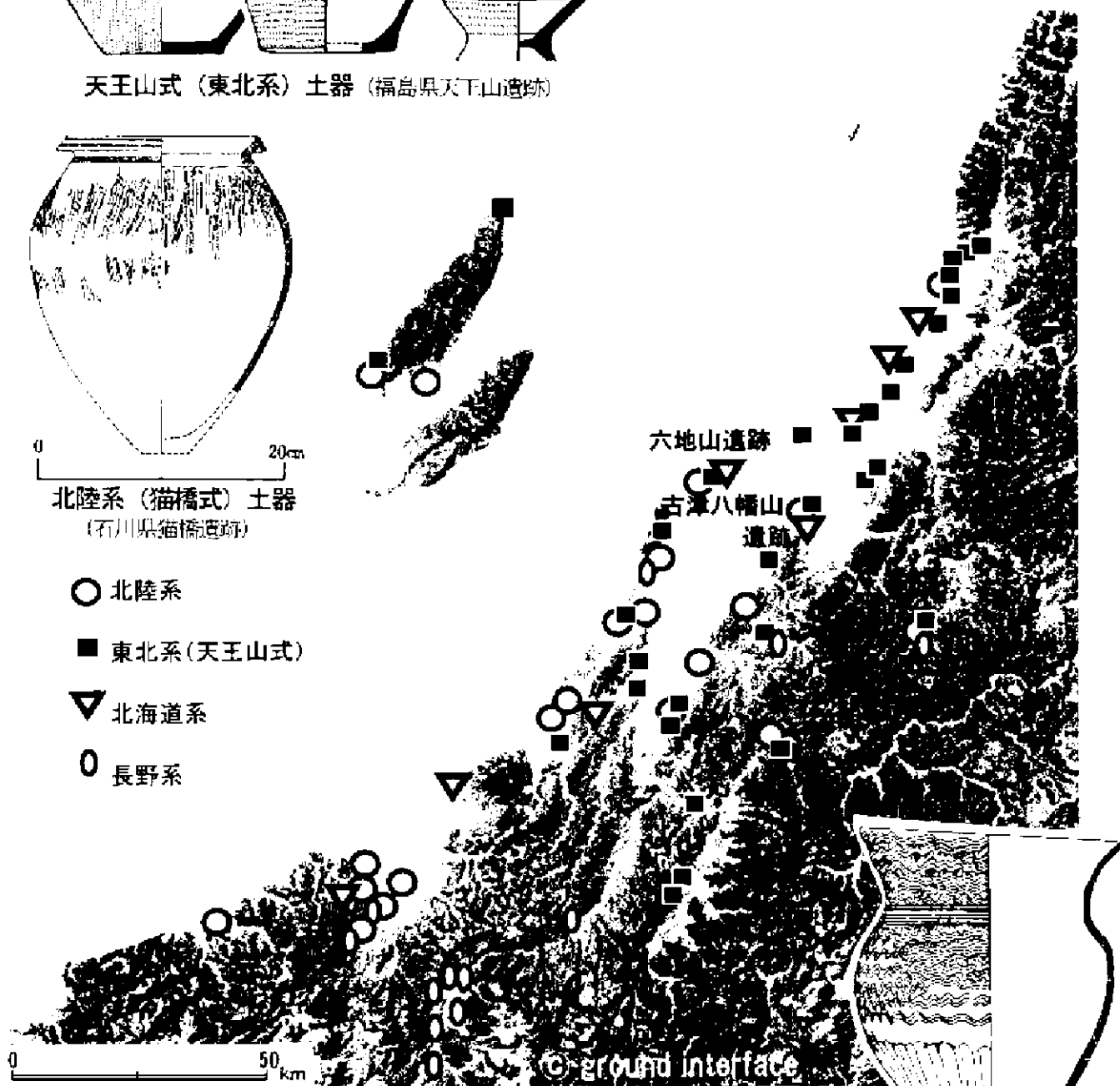


天王山式（東北系）土器（福島県天下山遺跡）

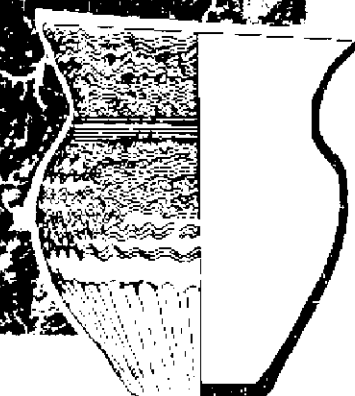


北陸系（猫橋式）土器
（石川県猫橋遺跡）

- 北陸系
- 東北系(天王山式)
- ▽ 北海道系
- 長野系



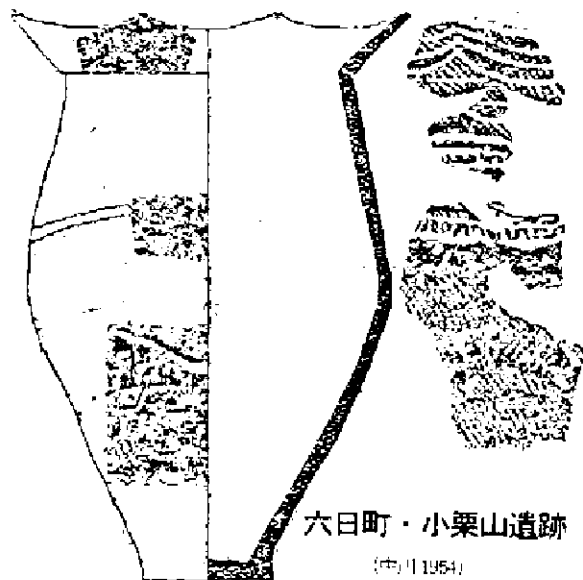
東西南北の土器（＝人びとの動き）が交わる新潟県域



信州系（箱清水式）土器
（長野市鉄道車両基地遺跡）



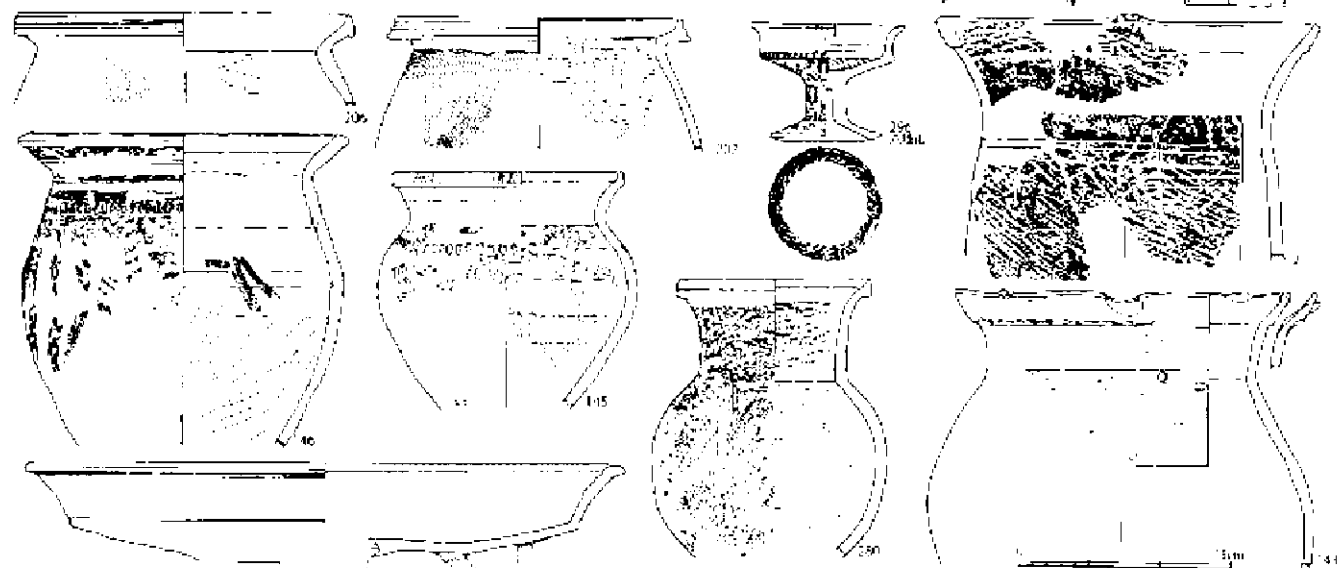
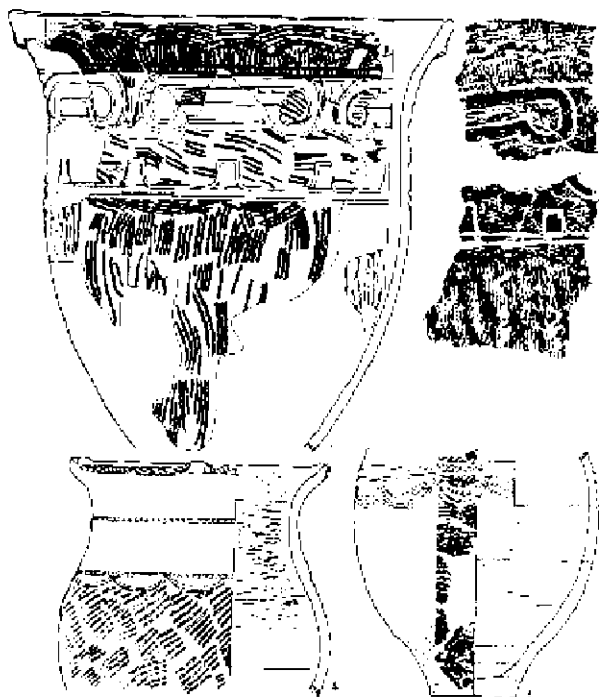
佐渡・せこの浜洞窟 (新藤 1937) (ものさしの単位は「cm」)



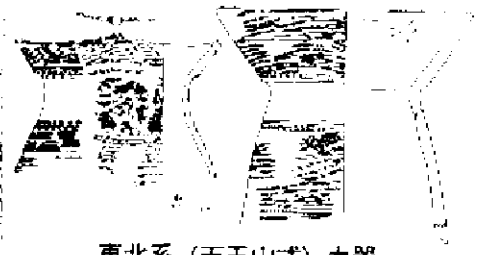
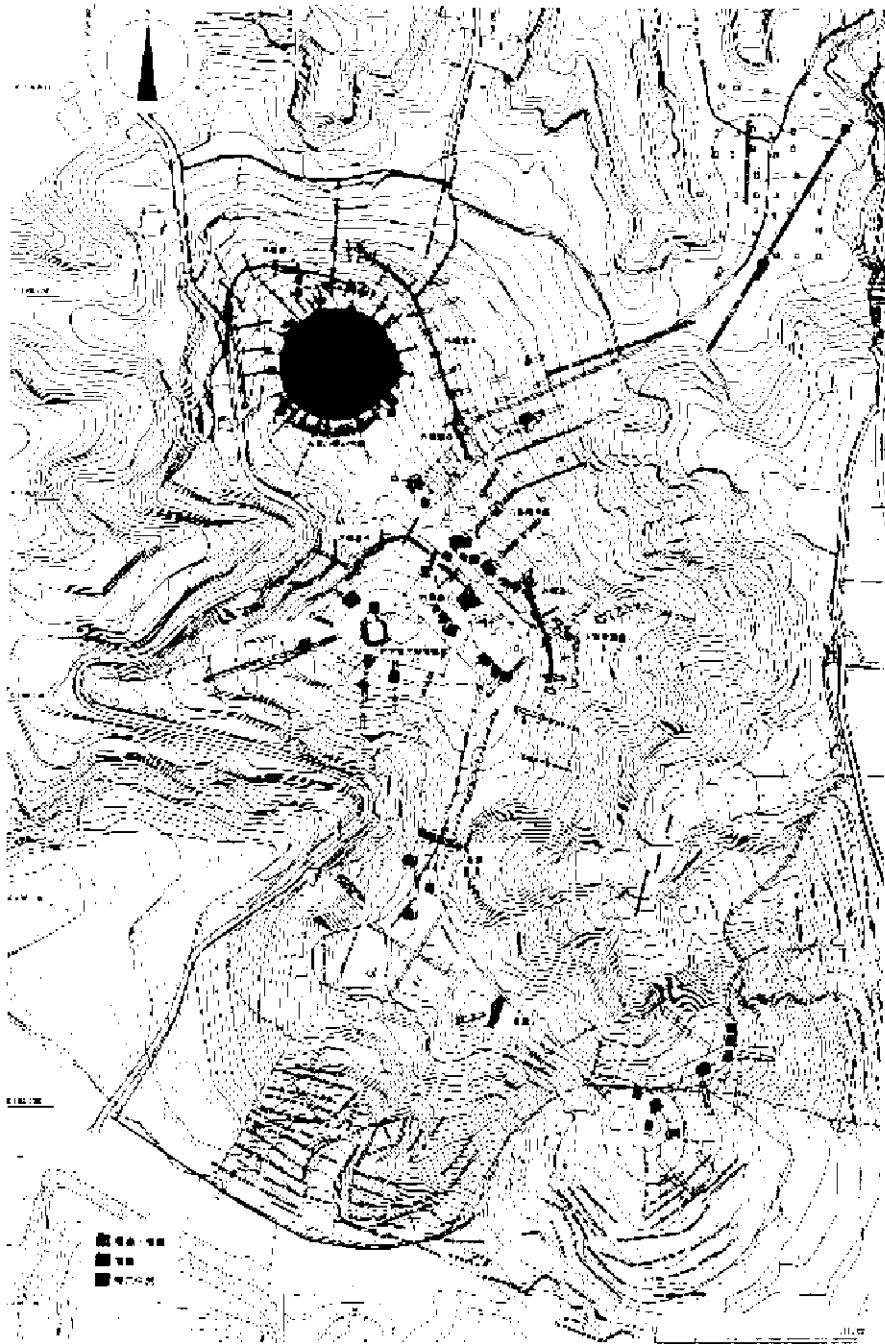
六日町・小栗山遺跡
(内川 1954)



古津八幡山遺跡調査開始(1987年)
以前の県内の主な弥生後期遺跡



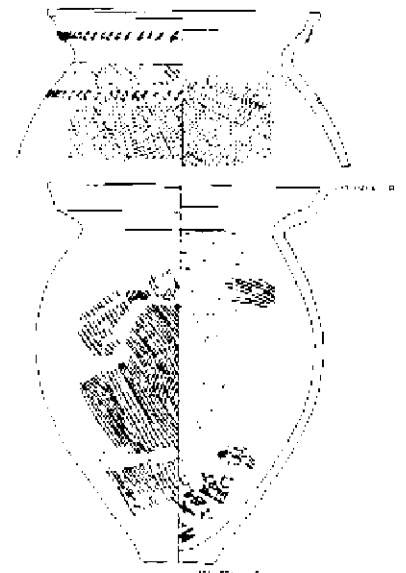
新潟市六地山遺跡 (1956年調査・表制は横倉 1972)



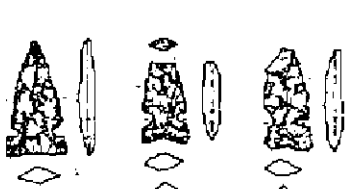
東北系（天王山式）土器



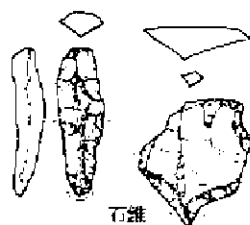
折衷（古津八幡山式）土器



北陸系（猫橋式）土器



「アメリカ式」石鏃



石鏃

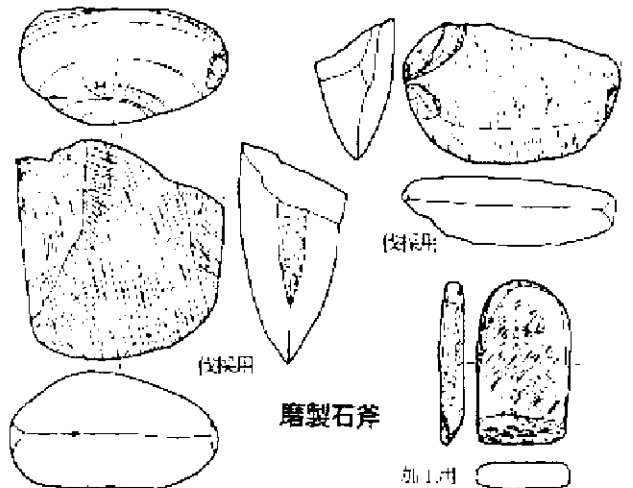


右筈石鏃

打製石器



ナイフ



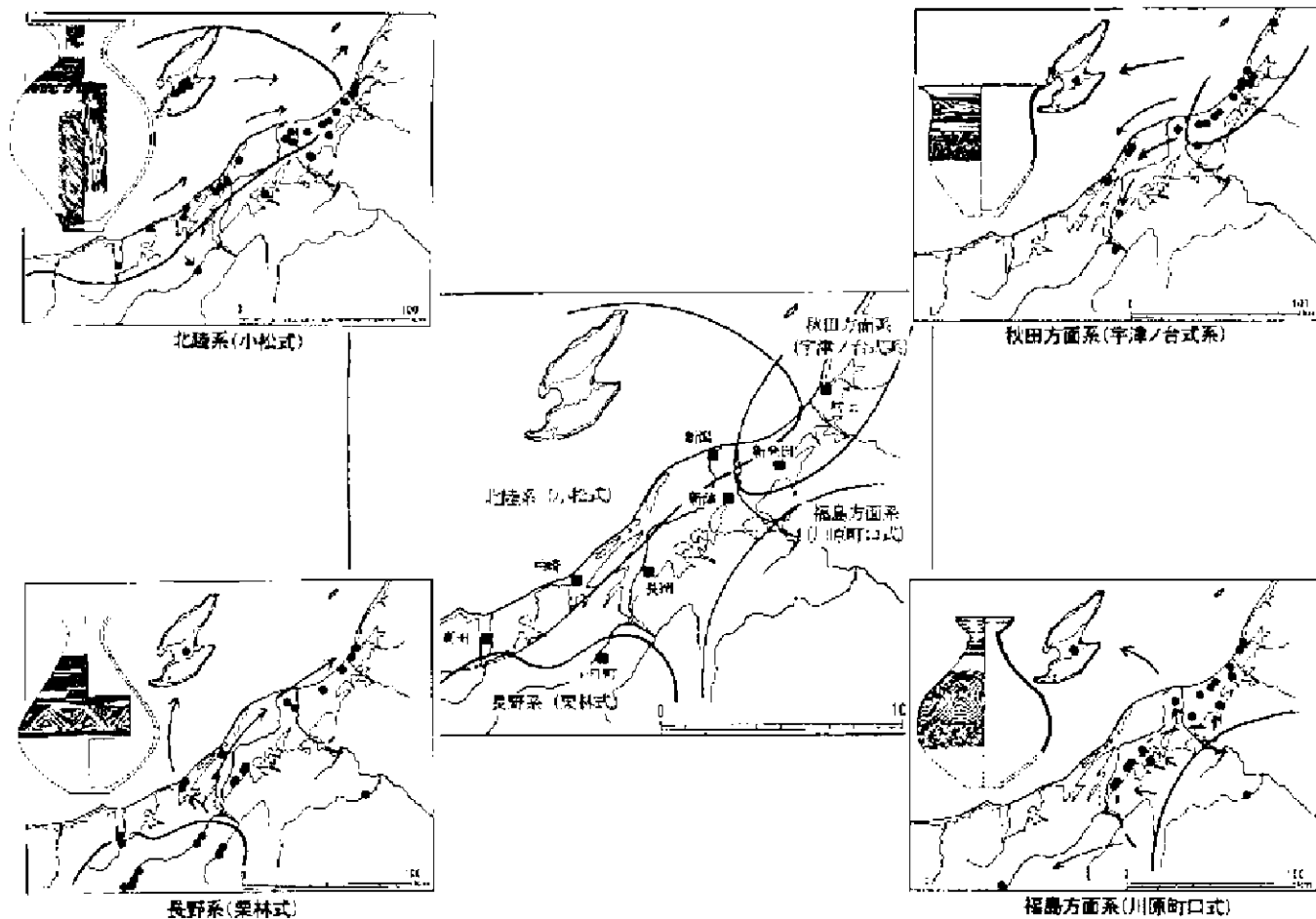
石槌

石鏃

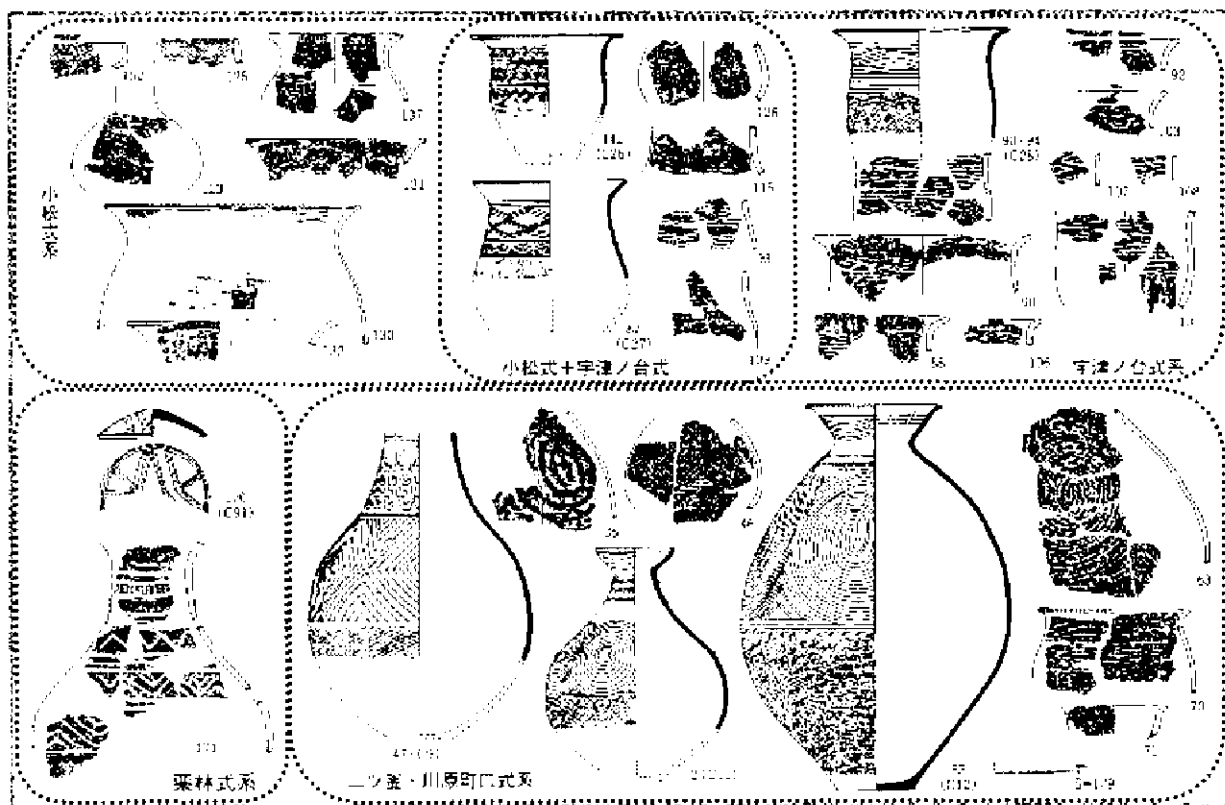
磨製石斧

石刀

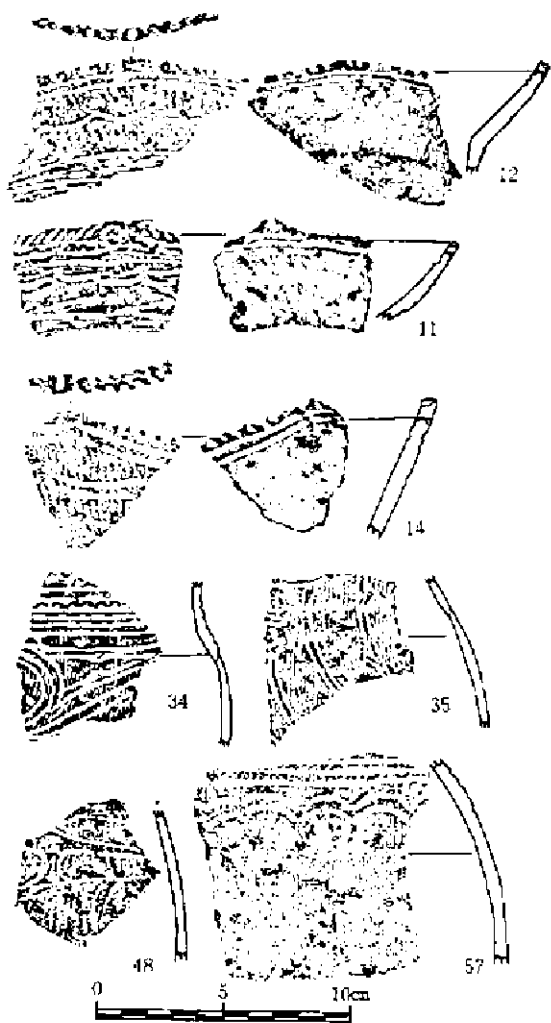
新潟市秋葉区古津八幡山遺跡 (2004.10.15-2007)



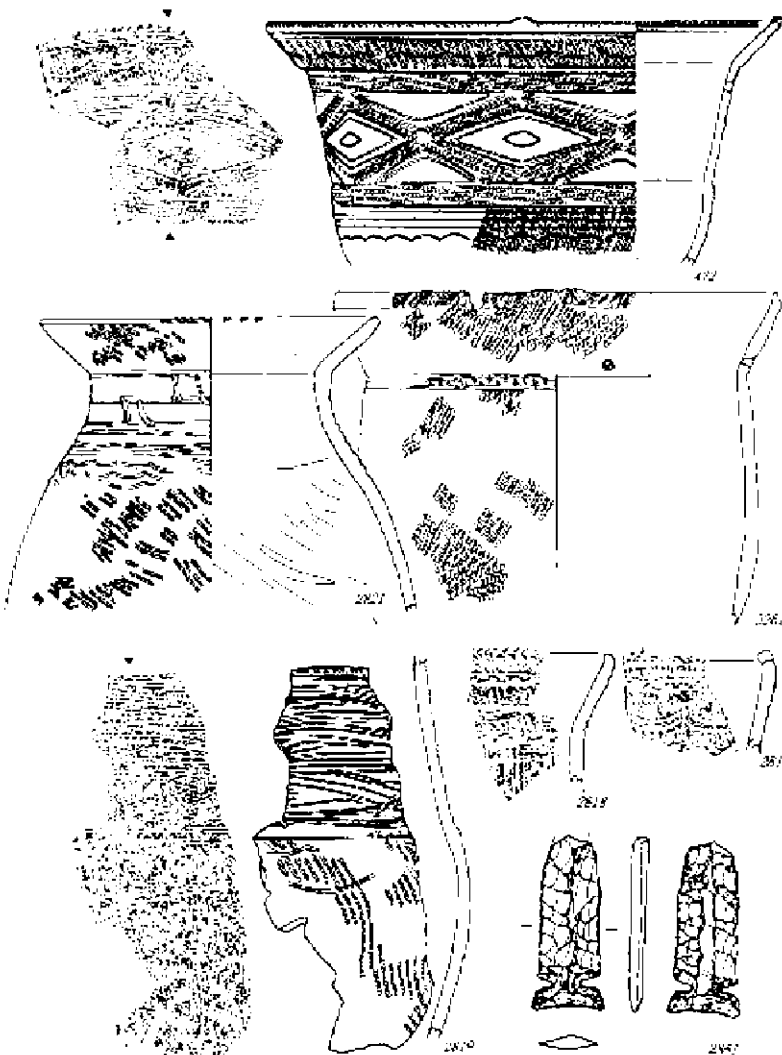
弥生中期後半 (BC1世紀) : 新潟県域の東西南北交流



新発田市山草荷遺跡の土器群構成 (6.11.2019) : 東西南北交流の現場



高岡市頭川遺跡 (上野 1974)



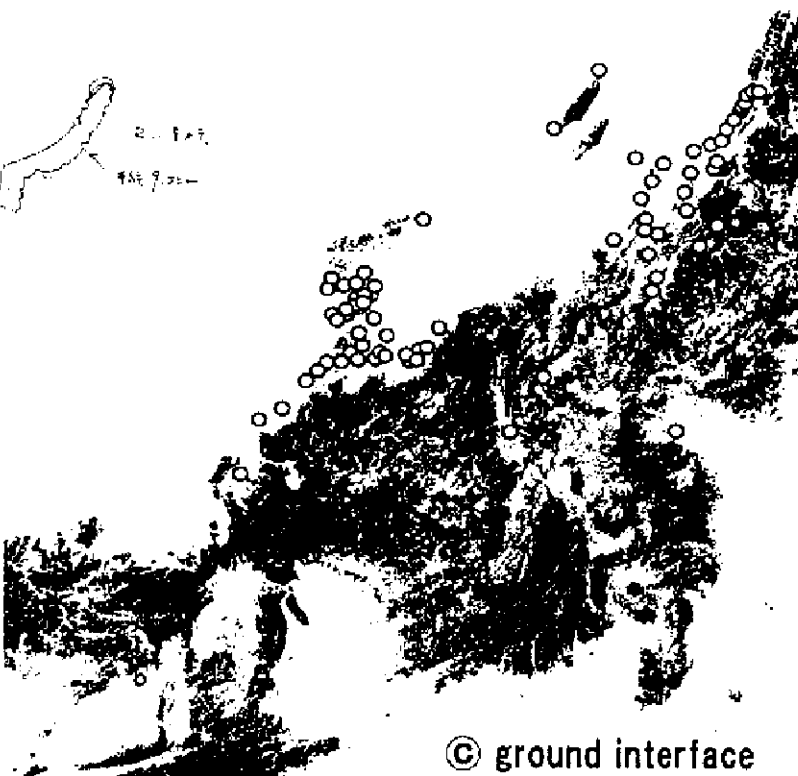
高岡市下老子笹川遺跡 (宮田 2006)



加賀市大野山遺跡の天王山式土器 (石川裕純)

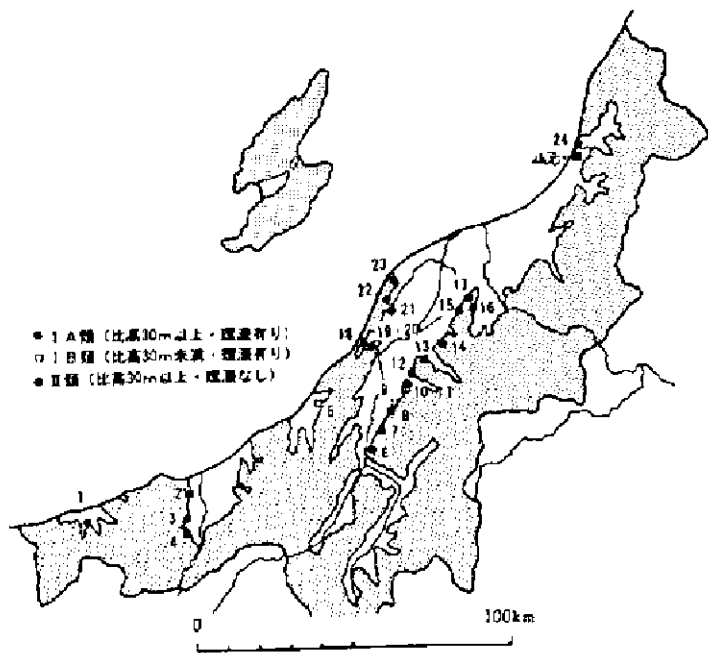


大阪府芝生遺跡 (石川マモ, 右: 『新版古代の日本』 5)



© ground interface

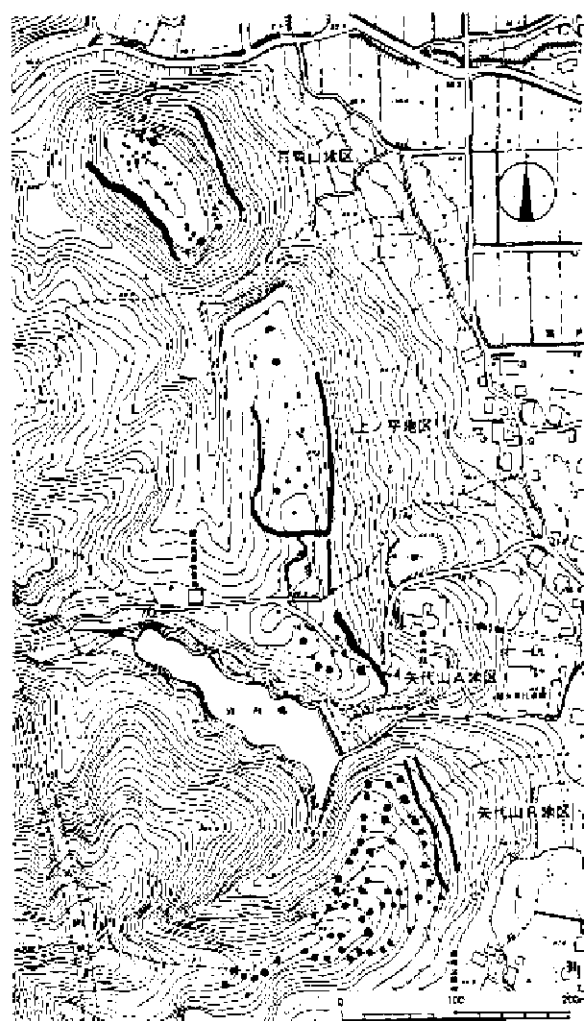
西へ行き交う天王山式土器をもつ人びと



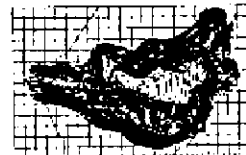
山元遺跡



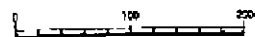
17：古津八幡山遺跡



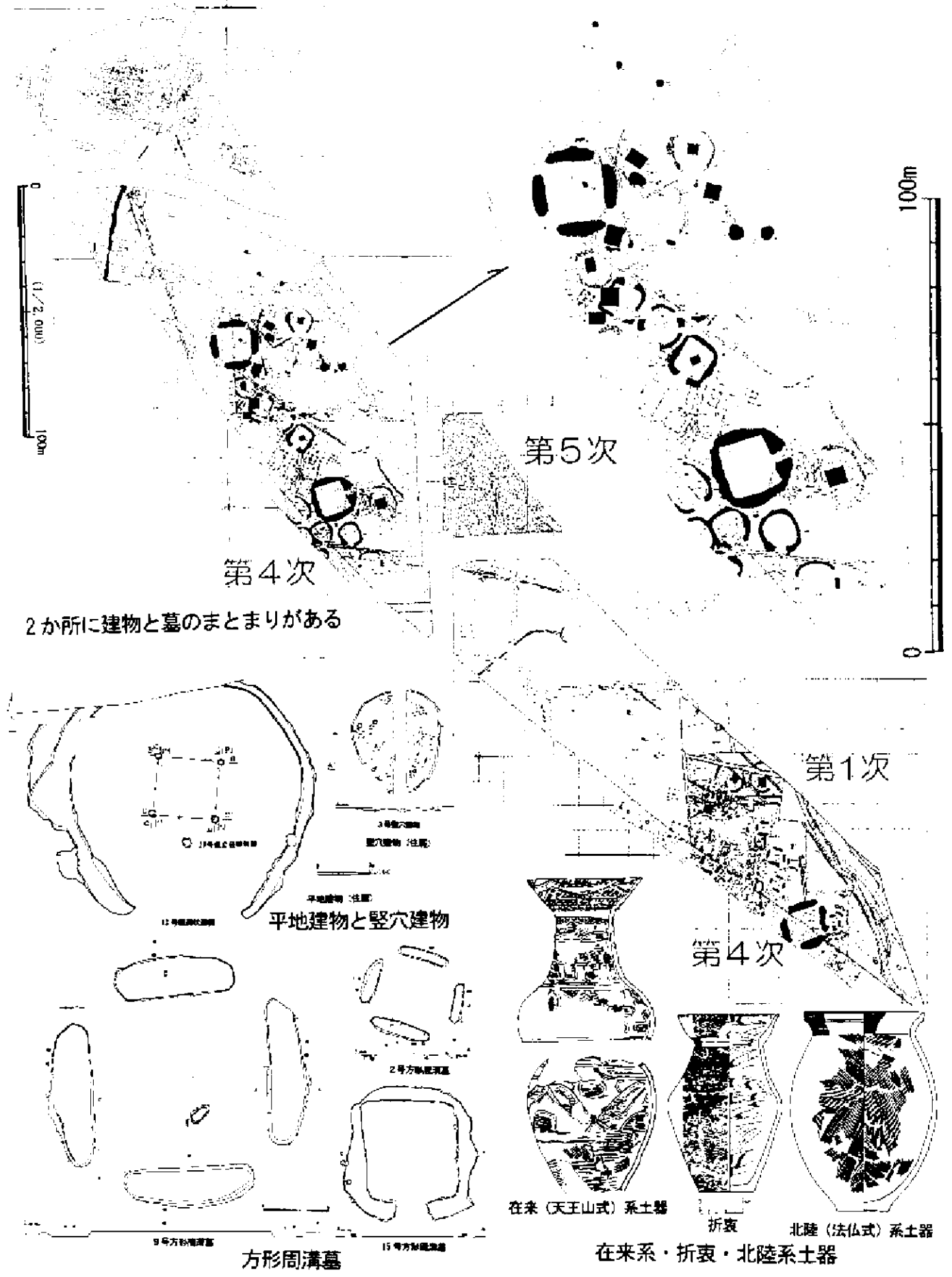
4：斐太遺跡群



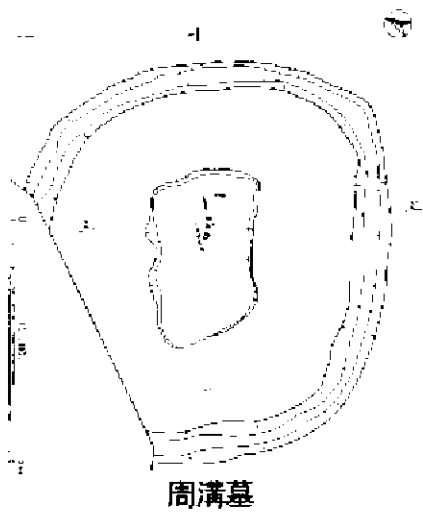
2：裏山遺跡



弥生時代後期にだけ現れた高地性集落 (磯部 2008)



会津盆地の湯川村桜町遺跡 (平面図と新潟市文化財センター作図；元データは福島県文化センター)

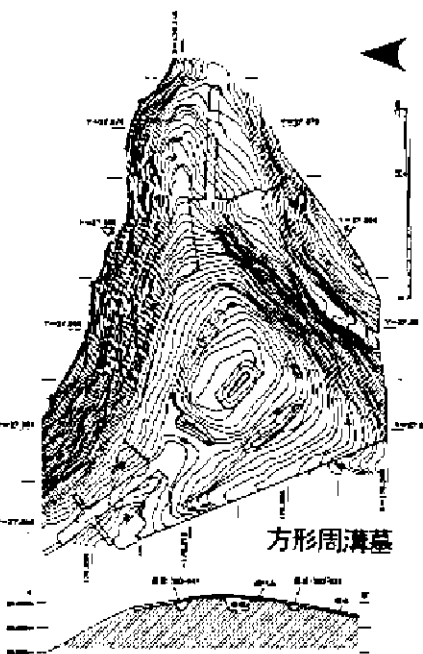


周溝墓

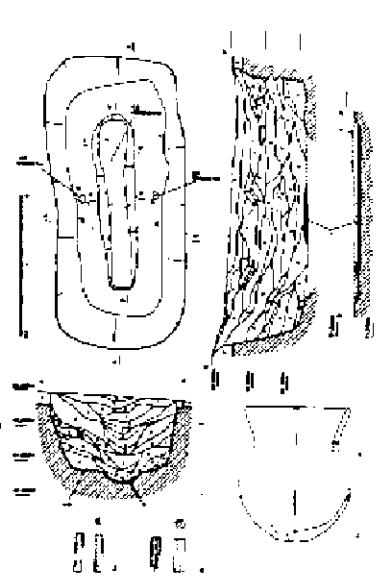


袋状鉄斧

長岡市(旧和島村)姥ヶ入南遺跡(新潟県埋文事業司2010)



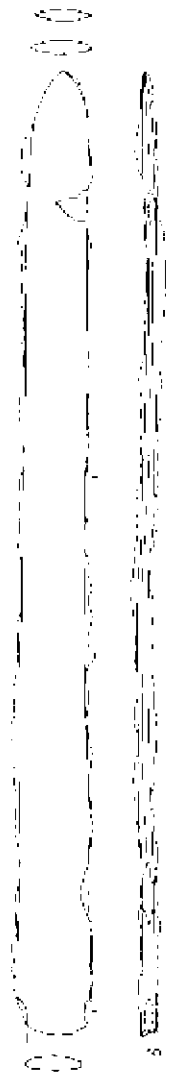
方形周溝墓



埋葬施設と副葬品

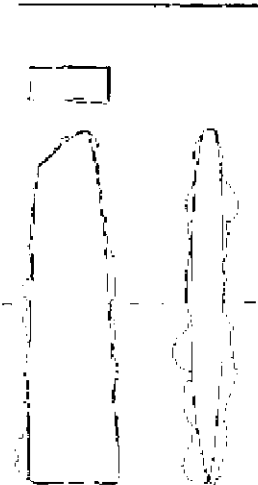


西方系土器

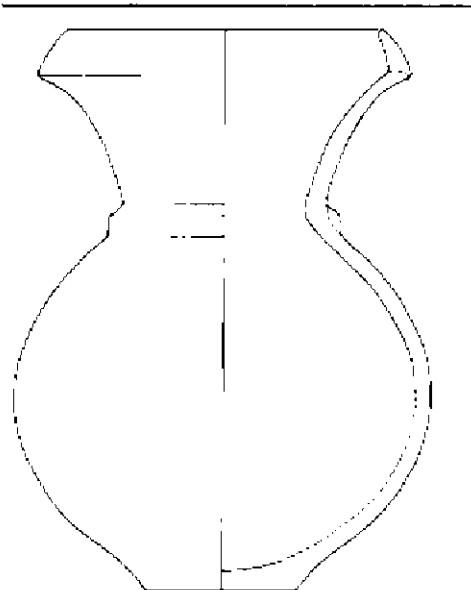


鉄剣

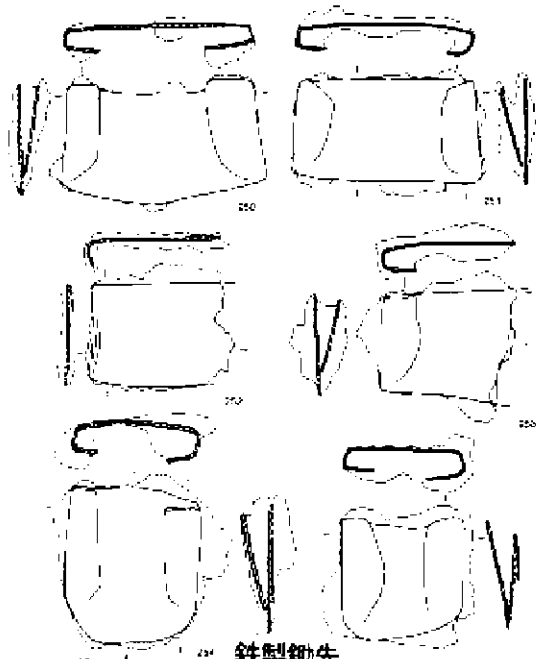
長岡市(旧寺泊町)屋鋪塚遺跡(寺泊町教委2010)



板状鉄斧
三条市経塚山遺跡
(三条市教委1999)

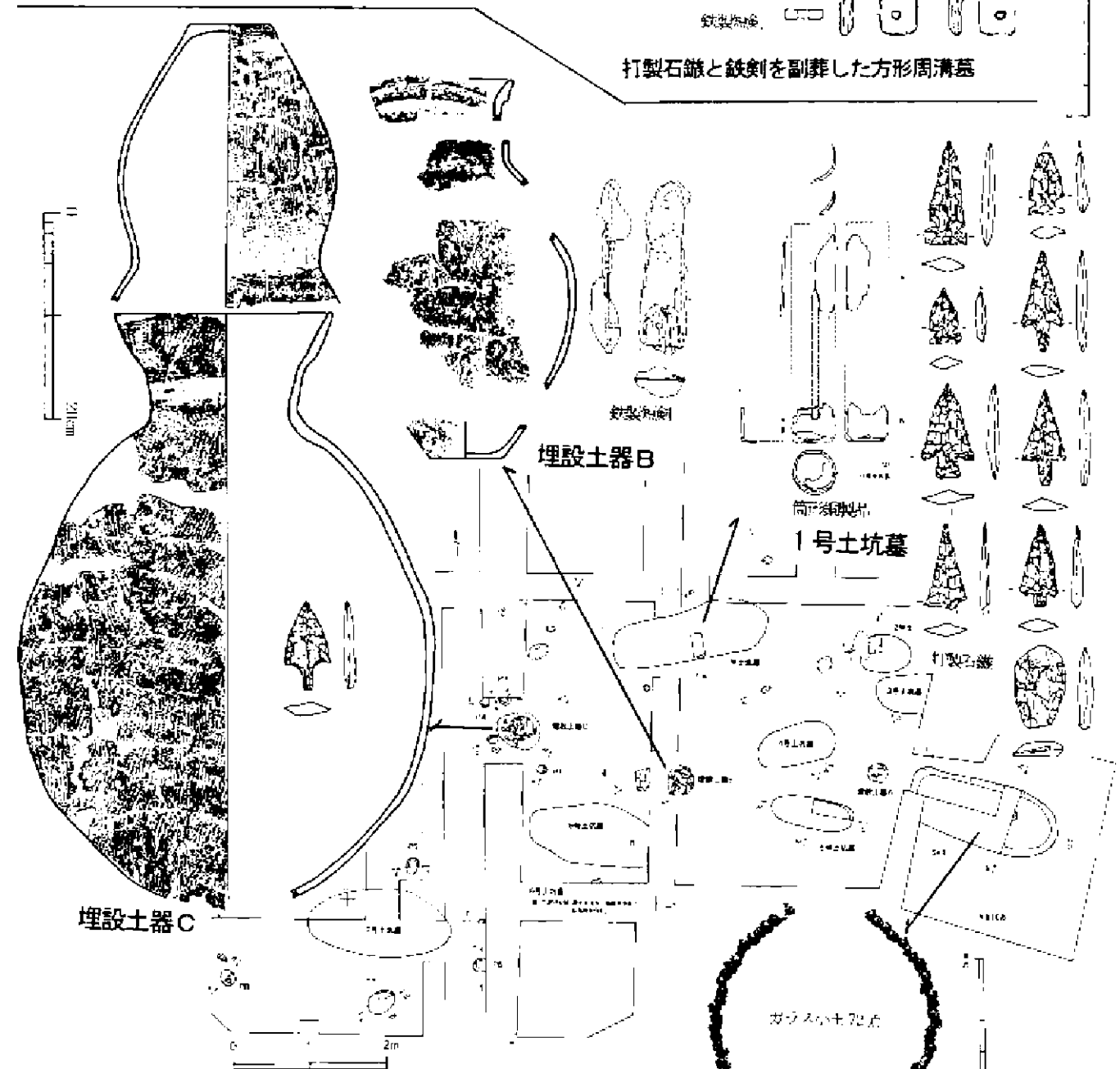
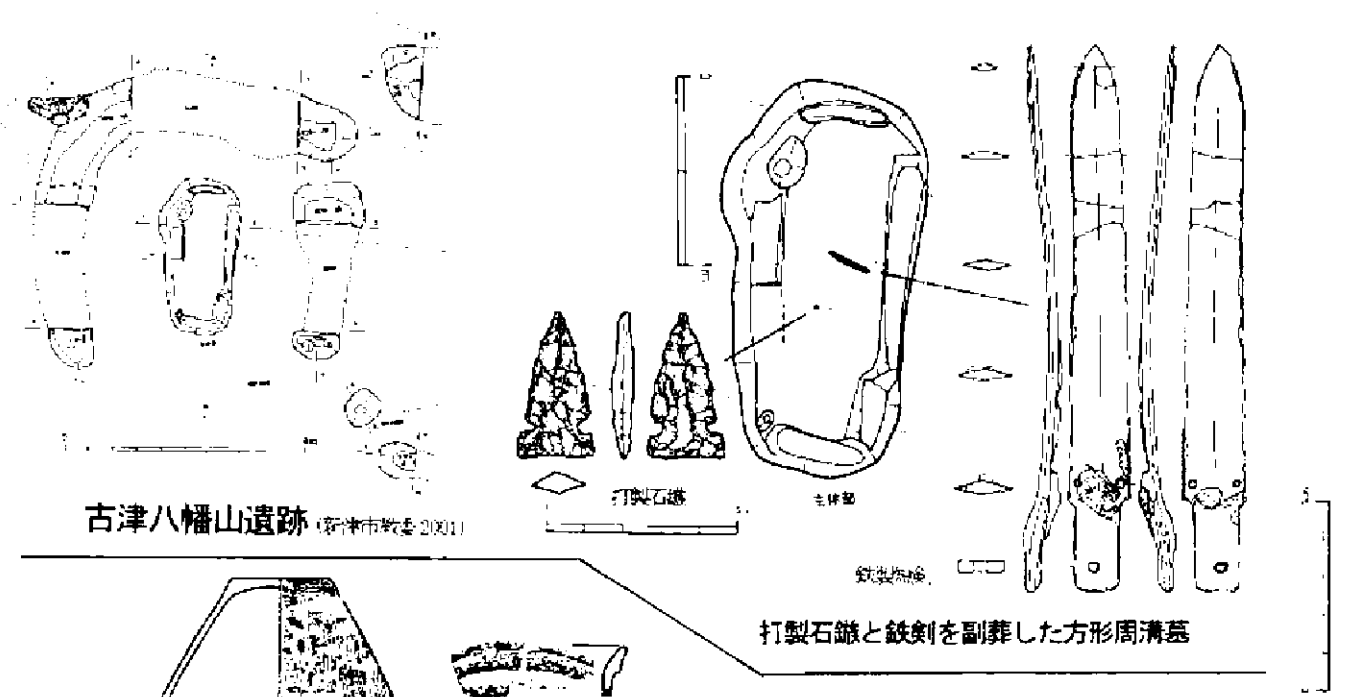


柏崎市開運橋遺跡(柏崎市1987)



鉄製鋤先
上越市裏山遺跡(新潟県埋文事業司2000)

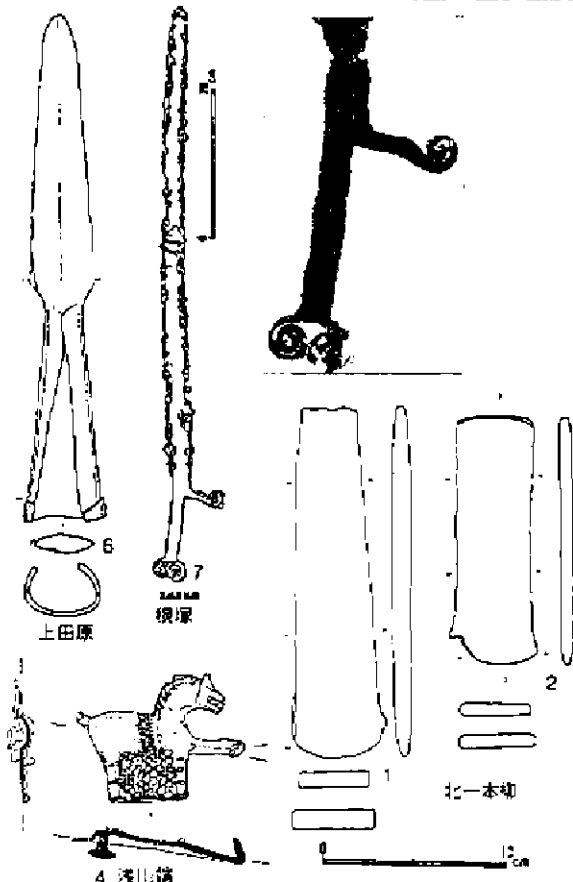
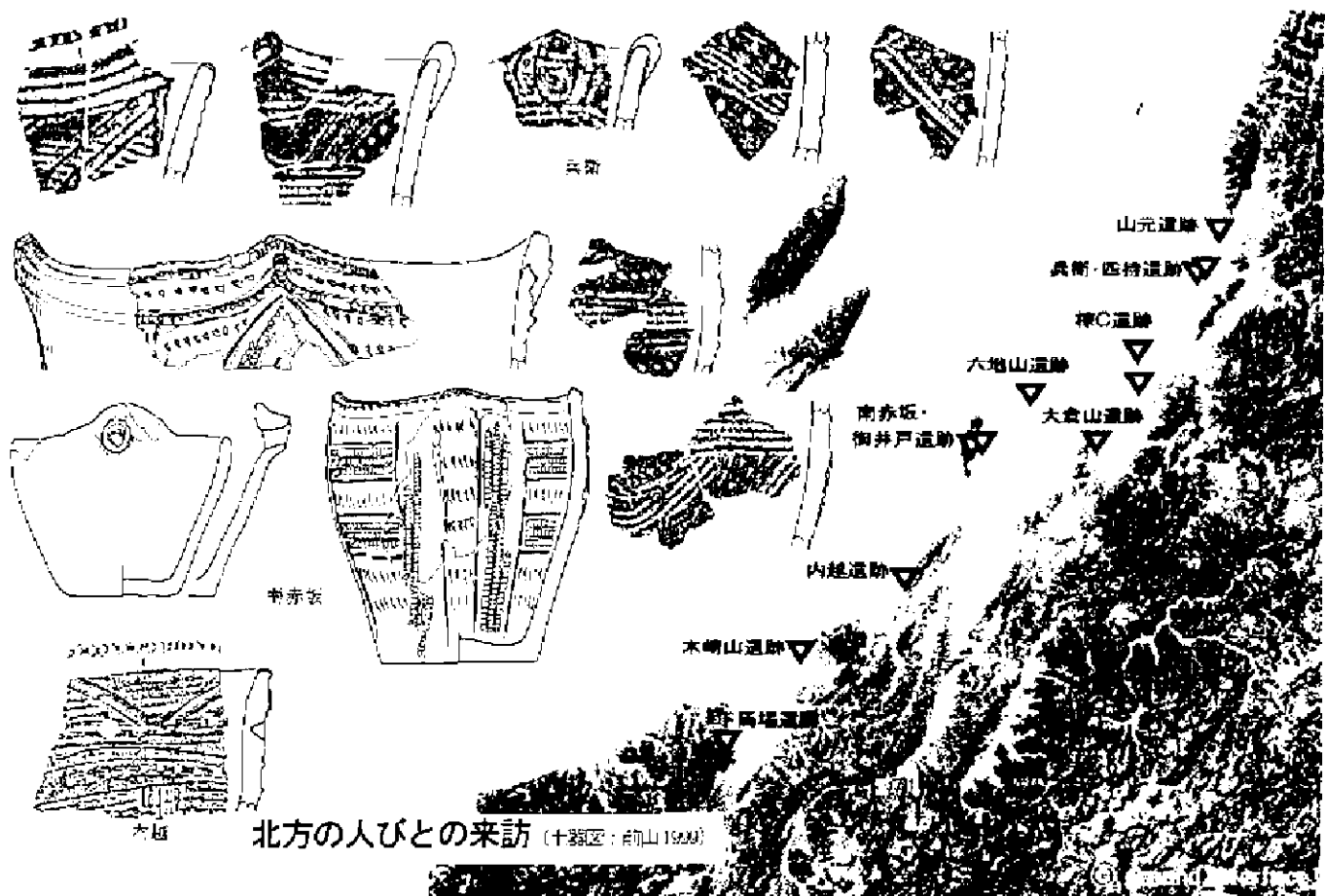
弥生後期に西方から新潟県域にもたらされた文物



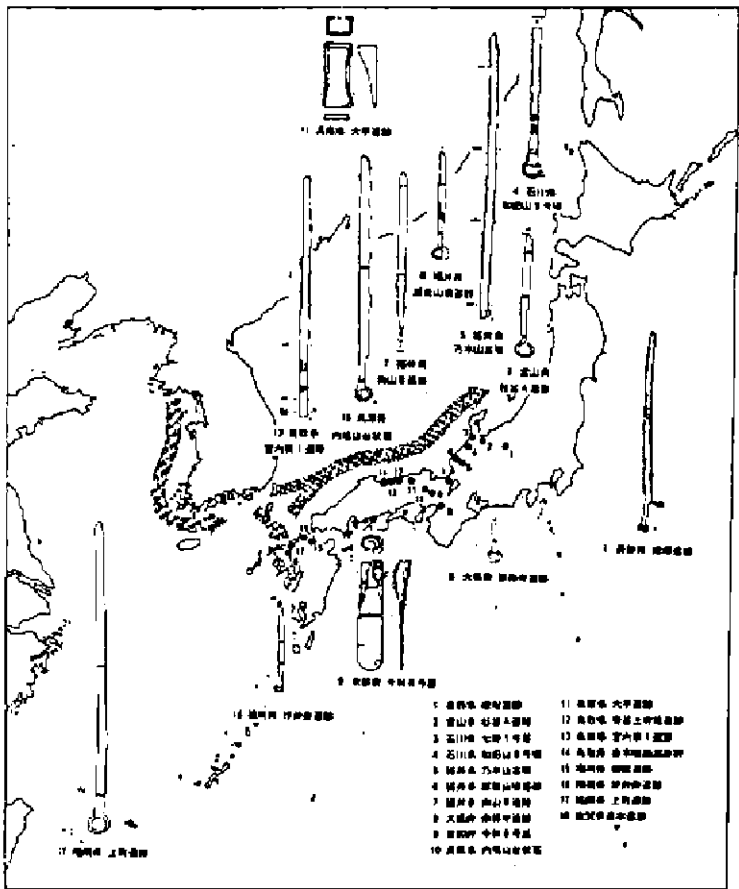
村上市山元遺跡 (新潟県埋文事報第2009・村上市教委2013)

北方と西方の特徴をもつ墓

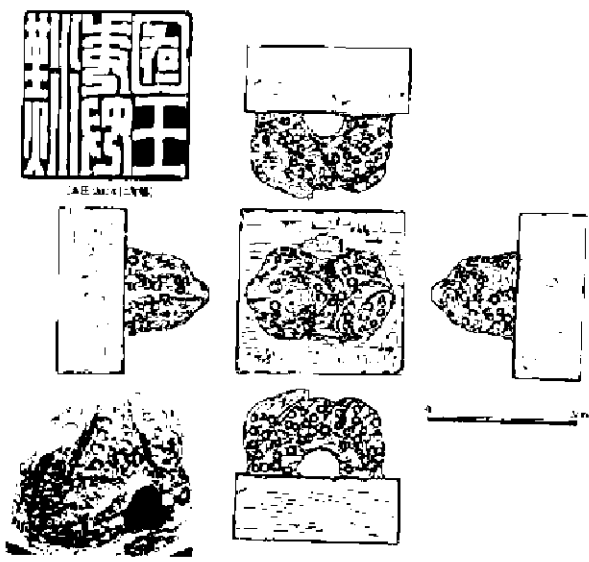
SK1 (土坑墓)



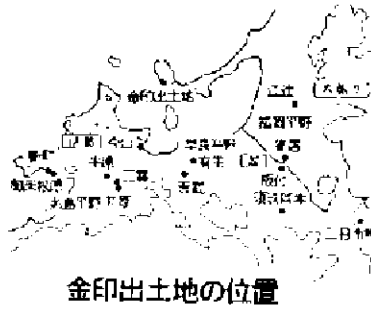
朝鮮半島からの文物 (各遺跡報告より)



2～3世紀：朝鮮半島製鉄器の日本海流通 (林2002)



金印実測図 (木口印刷)

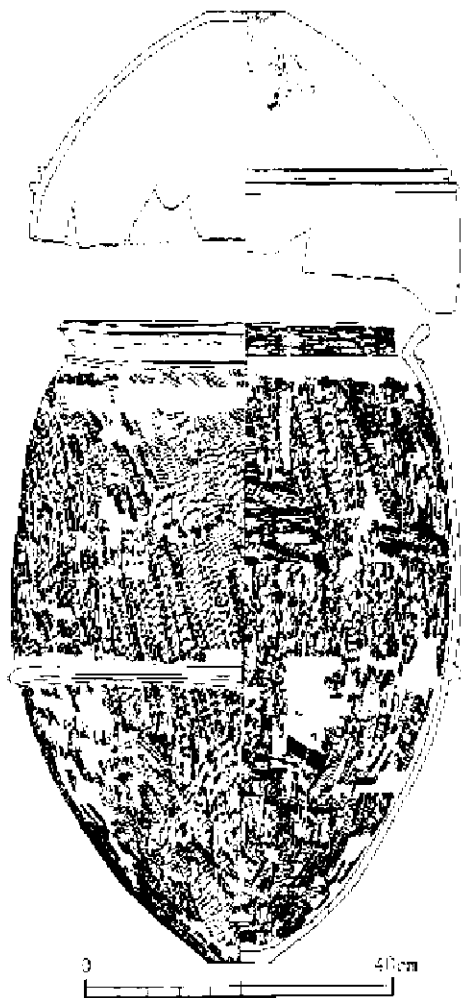


金印出土地の位置

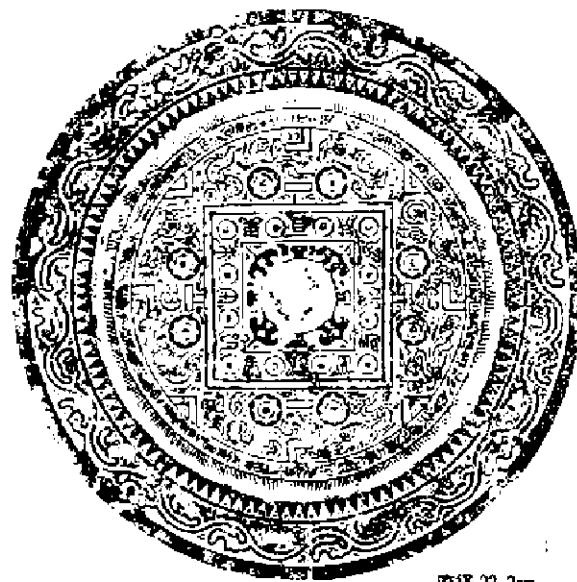
建武の元二年、倭の武内宿禰、事夷朝貢す。使人曰ら大夫と称し、倭國の國南界なり。光武
に印綬を以てす。
安帝の永初元年、倭の國土節升等、生口百六十人を獻じ、贈答を蒙る。
和・漢の間に、倭國大いに亂れ、其、相攻伐し、無主なし。一女子あり、名を倭姫王といふ。
建武共殺之。建武中元二年、倭奴國奉貢
朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光
武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升
等獻生口百六十人願請見相靈間倭國
大亂更相攻伐歷年無主有一女子名曰
倭彌呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑衆

後漢書 (抜粋)

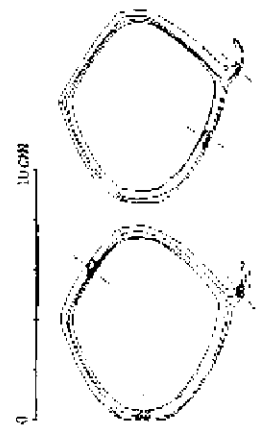
倭人初の本格外交：「漢委奴國王」金印



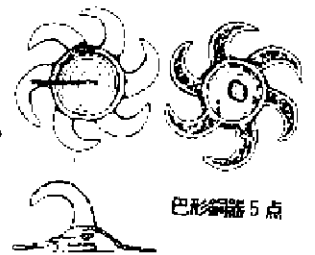
面径 40cm



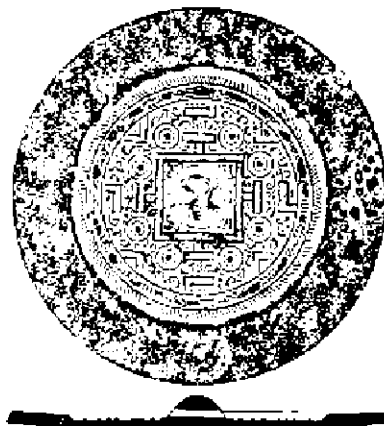
面径 23.2cm



有銘銅鏡 26 点



巴形銅鏡 5 点



面径 15.4cm



素環頭鉄刀

この他 鏡玉勾玉 3・管玉 13
ガラス管玉 14・小玉約 2400

佐賀県唐津市桜馬場遺跡甕棺に副葬された中国製銅鏡と素環頭鉄刀 (唐津市教委 2014)